



ドーソン振付『ザ・ヒューマン・シーズンズ』でのスティーヴン・マクレイ
Photo: Emma Kauldhar by kind permission of the ROH

『ザ・ヒューマン・シーズンズ』

待望のデイヴィッド・ドーソン新作が、ロイヤル・バレエで大成功を収めました。デボラ・ワイスの速報をお届けします。

ロイヤル・バレエ出身の振付家デイヴィッド・ドーソンが、ロンドンに凱旋して振付を行う。実現までに時間はかかったものの、バレエ団のこの決断は、諸手を挙げて歓迎すべきものである。ロイヤル・バレエ学校を卒業後、若い頃はバーミンガム・ロイヤル・バレエにも在籍したドーソンだが、振付家としては主にイギリス国外で力を蓄え、名を成し、熱狂的な評価を受けてきた。これまで英国内で上演されてきたいくつかの作品に加えてこのたびの新作『ザ・ヒューマン・シーズンズ』を観れば、彼が今や国際的にひっぱりだこである理由が、よく分かるというものである。

この日のトリプル・ビルの幕開きを飾ったのは、ウェイン・マクレガーの『クローマ』。2006年の初演にはその舞踊語彙の過激なアスレティシズムで衆目を騒がせ、今もゆるぎない評価を誇る作品である。ロイヤル・バレエのダンサーたちはこれを見事に踊りこなしていたが、美意識よりも動きの目新しさが見どころであるだけに、既視感が驚きに勝ってしまった。多くの振付シーケンスには彫像的な美しさがあるが、寸断されたラインはときに醜く、唐突で違和感を覚える。ルーシー・カーターの照明は素晴らしく（このバレエ団の現代作品は、真夜中に洞窟の中で観ているのかと思うようなものも多いので、これは

類い稀な美点だ）、メリッサ・ハミルトン、エドワード・ワトソン、エリック・アンダーウッド、スティーヴン・マクレイは目まぐるしいスピードで柔軟な肢体を見せつけ、マクレガーの振付とみごとに一体化していた。戦慄を誘うほどに魅力的で、スタイルの体現という意味でも過不足はなかったが、しかしこの作品は、どこから来てどこに向かうのだろうか？『クローマ』以降のマクレガーは、独特の振付語彙と“インパクト主義”から、踏み出せないでいるように思える。

『ザ・ヒューマン・シーズンズ』でのドーソンのアプローチは、それとは対照的ともいえるものだった。4人の女性がパートナーに支えられて空中でポーズする開幕の瞬間から想像を超えた革新性にあふれ、濃密な精神の旅へと私たちをいざなう。時間が止まったような静寂から、作品は魔法のような時空間へと流れ込んでゆく。ドーソンの用いる語彙は、その純粋さやリフトの造型の妙が非常にバレエ的だが、その一方で、女性が滑るように移動して行く動きや、マクレイの最初の爆発的なソロでの急激な方向転換には、意外性が巧妙に仕込まれている。何よりこの作品を異次元のレベルに引き上げているのは、つなぎのステップの信じられないほど繊細な扱いである。振付の波や流れの中でダンサーがいつの間にもそのポジションを取ったのが全く見えないほどで、またピルエットのための準備動作や大きな跳躍の前の重心の変化といった不格好なものが、一切ないのである。真に美的な、極めつけの構成であり、また物語はないのに（ジョン・キーツの同名の詩に緩やかに依拠してはいる）、強く感情を喚起する力を持っている。グレッグ・ハインズの委託曲は最後の一言に至るまで動きに反映されていたし、男性の白いタイツ、女性の特注のレオタードはいずれもダンサーたちによく似合って美しかった。イーノ・ヘンツェの美術と映像プロジェクションには過剰な主張がなく適切で、舞台をうまく縁取っていた。パート・ドルヒューゼンの照明も同様である。ダンサーでは（なぜか『クローマ』とかけ持ちの出演者が多かった）先に挙げた4人に加え、“秋”のデュエットでのマリアネラ・ヌニェスとフェデリコ・ボネッリが特筆すべき素晴らしさだった。そしてそれだけでなく、ドーソンの新作を全員が情熱をもって踊り、それぞれのよさが存分に発揮されていたのである。本作が、ドーソンとイギリスのバレエ界の長い協力関係の第一歩となることを、心から祈っている。

『ザ・ヒューマン・シーズンズ』ほどの作品の後に公演を締めくくるとは、よほどパンチが効いたバレエでなくてはならない。マクミランの『春の祭典』はそれにふさわしい傑作で、1962年の初演以来その衝撃が薄れることがなく、この日もダンサーたちは作品に相応しい踊りを見せた。群舞（ソリストも多数含まれている！）には圧倒的な力が漲り、“選ばれた者”役のゼナイダ・ヤノウスキーは畏怖を覚えるほどの迫力だった。しかしこの名作、名演をもってしても、ドーソンの新作の前には、影が薄くなってしまったと言わざるをえないのである。（訳：長野由紀）